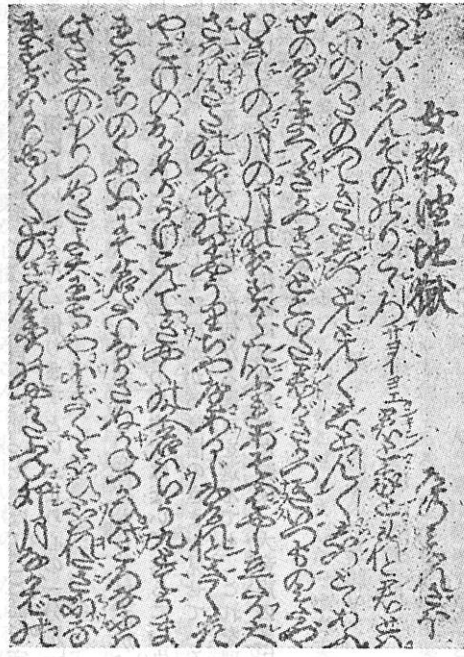


「父母の顔を見ても、心は打つて泣く。船を抜いて来た、さびたるくくりさりと聞けば、つと入るより胸も極も落しつけ……」



油地獄 古版本巻頭

「……」と泣きながら、船を抜いて来た、さびたるくくりさりと聞けば、つと入るより胸も極も落しつけ……」

女殺油地獄

上の巻 通行みなれざを

「^唄船は新造の乗り心、サヨイヨエ君と我と、我と君とは圖に乗つた、乗つて来た。しつとんとんとんとんとんとん。しつとと逢瀬の波枕、盃は何處いた。君が盃、いつも飲みたや武藏野の、月の、月の夜すがら戯れ遊べ。」^嗚し立てたる大騒ぎ。北の

女殺油地獄

通釈 「船は新造」の踊歌やら、「しとんとん踊」の文句やら、船拍子に合わせて囃し立て、大はしゃぎにはしゃいで行く屋形船がある。それは曾根崎新地の料理茶屋、女やもめに花が咲くとやらの諺通り、主人はないが益と繁昌、屋号も花屋の女将お亀が、万事承知の上で引受けて来たのである。客の変名は郎九といって、奥州は会津の生れ、下世話にも会津蠟燭流れぬというが、金遣いにもどこやら締りがあつて、羽目を外して浮名を流すこともせぬ人物。それがこの頃、浪華のこの廓へ足を入れ、抱えの小菊を思い思われたさに、しげじげと天王寺屋へ通つて来る。今日しも鯉川からゆらゆらと